慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | アーカイヴをどこから見ているのか：研究フォーラム「生成するアーカイヴ」に参加して |
| Sub Title | Additional notes on study forum of KUAC titled Archive as a genetic engine. |
| Author | 柳田, 利夫(Yanagida, Toshio) |
| Publisher | 慶應義塾大学アート・センター |
| Publication year | 2019 |
| Jtitle | Booklet Vol.27, (2019. ) ,p.34- 46 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | Art and archive 2<br>図版削除 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000027-0034 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アーカイヴをどこから見ているのか
## ――研究フォーラム「生成するアーカイヴ」に参加して

柳田　利夫

### はじめに

2018年10月26日、慶應義塾大学アート・センターで開催された「生成するアーカイヴ：創造の軌跡をもとめて」と題する研究フォーラムに参加する機会を与えられ、「アーカイヴをどこから見ているのか」というタイトルで少しだけお話しさせていただいた。ここでは、その際の話題を簡単にまとめた上で、会場では議論することができなかった点について、自分自身のアーカイヴとの関わりを振り返りつつ、思いつくままに書かせていただきたいと思う。「アート」や「アーカイヴ学」の世界とは全くもって無縁であり、アーカイヴについて語るための基本的な語彙や概念すら持ち合わせていないので、既に自明のことを、稚拙な言葉遣いで語ることになっていると思う。予め御容赦いただければ幸いである。

### Ⅰ　「どこから見ているのか」と「どのように見ているのか」

研究フォーラム当日の私の話を、まず簡単にまとめておこう。

明治15（1882）年年末から翌年9月にかけて、品川出帆の後、赤道を越え、ニュージーランドのウエリントンから南米西岸に至り、チリのバルパライソ、ペルーのカリャオを経由して、ホノルルに寄港した後帰国した日本帝国海軍練習艦龍驤は、その遠洋航海中25名もの脚気による病死者を出したことで知られている[★1]。この時、ペルーの首都リマ郊外の港町カリャオで脚気のために客死した二等水兵小島吉次郎の遺体は、急遽カリャオの英国墓地に埋葬された。それから40年近くの歳月が経過した頃、日本人移民によって偶然に発見された西洋式一枚板の彼の墓標は、「愛国の至情」あふれる日本人移民有志の手に依って、日本の軍人墓の形式に倣った堂々たる墓標として再建された、というのがペルー

移民有志により再建された墓碑

日系社会における通説となっていた。しかし、外務省や旧陸海軍関係の公文書等の一次史料に基づき墓標再建の事実関係を辿ってゆくと、墓標の発見は、第一次世界大戦参戦を契機に実施された軍主導による世界各地の日本軍人墓調査の一貫として、外務省本省経由で依頼を受けたリマの日本領事館関係者によるものであったこと、墓標の再建についてもまた、日本人移民が受けた暴動被害に対する損害賠償交渉の膠着状態と、所謂軍艦外交の一環としての帝国海軍練習艦隊春日・磐手のペルーへの来航とに密接な関係を持っていたことを確認することができる。ペルーで客死した帝国海軍水兵の墓標の発見と再建の経緯を、アーカイヴの資料を利用して再構成してゆく作業を通じて、第一次世界大戦を契機とする大日本帝国の威信の増大を背景にして、自身に直接関わる現実的な問題解決という目的もあって、ペルー在住の日本人移民たちは縁もゆかりもない日本人水兵の墓標を再建し、それが彼らの「愛国の至情（ナショナリズム）」を生成・強化させ、やがては彼ら自身の言説となり通説となっていった[★2]、という趣旨の話をさせていただいた。

領事館員による墓碑調査の報告
（外務省外交史料館）

この話の個別具体的な内容は、研究フォーラムの趣旨と直接的な関係はない。ここでは、事実関係を再構成してゆく際に利用した資料の多くが、現在、外務省外交史料館と防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室という公文書館（アーカイヴ）に架蔵されている資料群であり、それらの資料は、一義的には国家の外交や軍事の記録として作成され、時間の経過と共にそれぞれのアーカイヴへと選別・移管され、アーカイヴにおいて整理・保存・公開されてきている公文書類であること、当然のことながら、閲覧・利用もまた、外交や軍事という文脈での問題関心からなされるのが一般的で、ここで紹介したような、日本人移民のアイデンティティとしてのナショナリズム生成といった問題関心を視野にいれて整理・公開されているものでは全くないということ、この2点を確認するのがここでの話の主題であった。10年以上前の小さな論文を持ち出してきたのは、アーカイヴで利用される資料が、アーカイヴを内側から見ている者と、外側から見ている者とでは、必ずしも同じように文脈化されるものではない、ということを具体的な事例を示して伝えたかったからに他ならない。

別の言い方をすれば、アーカイヴの内側の人々が、どのように慎重かつ誠実に資料の重要性を判断し、選別し、整理し、内容の要約については言うまでもなく、どのようなメタデータを付与したとしても、そこには自ら内側からの文脈化という限界があるということである。もっとも、反射的に感じられる程、この限界は必ずしもネガティブに解釈すべきことではない。なぜなら、アーカイヴを舞台に生成されるものは、アーカイヴの内側から見ている人々が想像するものに限られるものではなく、外側から見ることを通じて、更には、内側と外側の視線の交錯によって、より豊かに広がってゆく可能性を持っているとい

うことを同時に含意するからである。

従って、アーカイヴの内側からは、それぞれの専門性・立場性の視角から資料の整理・管理をする他はなく、意図的に資料の隠蔽や廃棄を行うというような場合を除き、それで良いということであろう。要はアーカイヴの内側にあるという立場性と整理・分類の基準を明確に外に向かって提示すれば足りるのであり、多様な文脈化に対応するような検索システム等を構築することは、本来的に求め得ないということでもある。そして幸いにも、それがアーカイヴの持つ創造性を限定することには必ずしも繋がらないということでもある。

当日のフォーラムの報告内に限って言えば、私の結論はかなり簡単でナイーヴである。即ち、アーカイヴを外側から見ている私のような研究者、訪問者の関心は、アーカイヴの内側で整理・管理に携わる人々と重なったり、理解されたりするとは限らない。従って、それぞれのアーカイヴの成立に関わる多種多様な専門性（文脈化・特権性と言い換えても良いのかもしれない）を本来的に持つアーカイヴは、それぞれがそれぞれの基準で整理・閲覧に対応すれば良く、むしろ、その多様性こそが更なる外側からの見えの可能性を拓くことにすら繋がるのではないかということでもあった。

このことはまた、アーカイヴを内側から見ている人は、それぞれの依拠する基準については統一をはかり、それを外に向けて明示しておく必要があるという意味で、「アーカイヴを開く」必要があるということでもある。それは、結局は自分たちがどこから見ているのかを、アーカイヴ自身が相対化するという作業であると言って良いのかもしれない。

アーカイヴ学という知的体系の構築と深化を寿ぎつつ、中央集権的で普遍的な基準の策定に向かうのではなく、それぞれのアーカイヴがそれぞれの基準と方法を持って資料の選別・登録・保管・公開を行うと同時に、それぞれのアーカイヴはその基準を外に向け開くことで、歴史学の分野で言えば、「アジア歴史資料センター」[★3]等で現実のものとなりつつあるようなプラットフォームへ向けたステップを踏み出す。異なったアーカイヴの多様な基準の共存と、中央集権的なアーカイヴ管理技術との調和とが求められているのであろう。余談ではあるが、近年各地で設立、改修がなされている公共図書館の個性的で多様なあり方については、賛否両論あるものの、旧来の日本十進分類法に必ずしも拘泥しない配架の仕方やスペース配分などを含め、この点はかなり示唆的であるように思われる[★4]。

ところで、無防備にアーカイヴの内側と外側という言葉を使ってきたが、これもまた実はいささか乱暴な物言いであった。アーカイヴの内側はアーカイヴの構造物の物理的な内側だけを意味するものでないことは多言を要しないし、また物理的な構造物としてのアーカイヴの内側であっても、またそれぞれの立場、職掌によってどこから見ているのかは変わってくるだろう。資料群の制度上の所有者、バックヤード全般を支えるアーキヴィストやキュレーター、情況次第では研究者としてアーカイヴの外側からアーカイヴの特定の資料群を閲覧・研究する立場に立ち得る人間、生業としてたまたまアーカイヴの内側に立っている人々が、アーカイヴの内側に共存している。

アーカイヴの外に位置する者にしても、資料群への関わり方には大きな差異が生まれ得る。職務上の調査、主体的な関心にかかる研究活動、創作活動、趣味・娯楽、などなど多様な関わり方がありうるだろうし、むしろ、その多様性は混乱を齎すよりも、後に述べるような公共性というものを考える際に看過できない視野を開いてくれるものであるとすら言えよう。

繰り返しになるが、アーカイヴの内側でも、資料群そのものにはほとんど積極的な関心を持たず、生業あるいは業務として見ている人と、個人的に非常に強い関心を特定の資料群に対して抱いて見ている人との間の資料群と個々人との関わり方の多様性と同時に、アーカイヴの外側でも、より主体的な関心（文脈化を志向）を持って見ている人と、軽い興味やさまざまなゆきがかりでアーカイヴを見ている人との差異のグラデーションが、どこから見ているのかという問題を考える上で大きな意味を持ってくることになる。

人が「どこから見ているのか」（視点）と「どのように見えるのか」（見え）は相互規定的であることは、認知科学的な知見を俟つまでもなく[★5]、私たちが日常的に経験していることであり、映画やアミューズメントパークのアトラクションがそれを巧みに利用したものであることは、ここで縷々説明する必要もないだろう。その意味で、アーカイヴをどこから見ているのかは、直接的にアーカイヴがどのように見えるのかにも関わることである。他方、「アーカイヴをどこから見ているのか」と「アーカイヴをどのように見ているのか」の関係もまた、そこには多分に、人の生業の場（職場）としてのアーカイヴや、研究活動（これもまた、生業であることに変わりはない）が本来的に内包しているイデオロギー的なバイアスなどを含めて考えるとしても、やはり相互規定的で多様であると言うことができるだろう。

## Ⅱ　アーカイヴをどこから見て来たか

「どのように見ているのか」という意味を少しだけ離れて、もう一度、研究フォーラムでの話のタイトルに立ち戻り、物理的な意味で「どこから見ているのか」に焦点をあて、自分自身の経験について少し考えてみたい。もちろん、既に述べたように、物理的な立ち位置は、必然的に問題関心としての「どこから」と相互規定性を持っていることを前提として、以下話を続けてゆこう。

私自身は、基本的には歴史を学ぶ者として、さまざまなアーカイヴの外側から、ビジター、閲覧者、利用者などという名付けをアーカイヴの側から与えられ、その名付けに相応しい振る舞い方を受け容れることでアーカイヴとの関わりを許されて来た。そして現在もまた、基本的には外の人であり続けている。アーカイヴ側の厚意でバックヤードや収蔵庫の中に立たせていただく機会はあっても、あくまでもそれは外の人としての分別を弁えての、例外的、一時的なことであって、基本は閲覧室のカウンターの外側で、内側の人が作成した目録や端末画面を眺めて検索し、必要と思われる資料を請求し、収蔵庫から運び出されてくる資料を受けとり、閲覧が終わればカウンターで返却する、という位置にあり続けてきた。

しかし、2000 年頃から、横浜のみなとみらい地区にある JICA 横浜海外移

住資料館[★6]が保有している資料の整理作業に関わることになり、日本海外協会連合会、海外移住事業団、国際協力事業団（現独立行政法人国際協力機構）とその名称と組織形態・機能とを変化させつつ戦後日本における海外移住の実務を担ってきた組織で作成、収集、整理されてきた歴史資料等の整理作業とその公開準備作業に、外部の学術アドバイザーという位置づけで関与することになった。アーカイヴの職員となったわけでも、ましてやアーカイヴの運営そのものに関わる立場に置かれたのでもないが、物理的にはアーカイヴの内側に立つことになり、収蔵庫内での各種作業や、他の機関・組織における資料調査・収集等はもとより、研究の必要から私的に構築したペルー日本人移民データベースの情報をアーカイヴでの利用・公開のために提供したり、果ては同館の所蔵資料公開にむけて歴史資料等の利用規則案まで作成しながらも、あくまでも部外者であり続けるという、いささか曖昧な場所に身を置くことになった。

2007 年からは、それに加えて、ブラジルのカンピーナス市にある日本人経

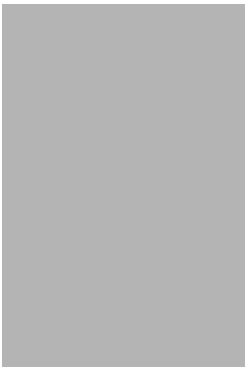
JICA 横浜海外移住資料館

ペルー日本人移民データベース

営にかかるコーヒー農場（ブラジル東山農場 Fazenda da Monte D' Este）に架蔵されていた戦前期からの資料を整理して、史料室として立ち上げるまでの一連の作業も経験することになった。農場の各所に散在する資料を集め、近くのカンピーナス大学歴史学専攻の院生たちの協力を仰ぎ、資料のクリーニング、分類、仮目録作成、写真撮影、保存までの作業を、自分の研究活動の一環として行い、農場の建物一棟を改造した史料室に整理・保存するまでの作業に立ち会った。ここでもまた、物理的にはアーカイヴの内側に立ち、本来アーカイヴの内側の人間が行う作業全般に携わりながらも、自分自身の立場は目の前にある資料群に強い関心を持つ研究者のそれであり、これらのアーカイヴの内側における作業は自分自身の研究活動の一部であるというスタンスは保たれ、アーカイヴそのものの運営や維持等々に直接関わる立場に置かれることは全くなかった。

ブラジル東山農場

2011 年、本務校に設置されていた文学部古文書室[★7]というアーカイヴの管理・運営を委ねられることになり、それまでの研究活動と全く無縁とまでは言



仮保存時の農場資料群

東山農場史料室

えないものの、ほとんど接する機会のなかった類いの史料群の整理、管理、閲覧を初めとするさまざまな資料の利用申請への対応業務等、アーカイヴにおける一般日常業務を含めて全般的にその管理運営を委ねられることになった。資料保存環境の調査、それに依拠しての収蔵庫等の改修工事や備品の購入、所蔵資料のデジタル化、アート・センターの協力を得ての所蔵資料の展示会開催などなど、大学教員の職務の一部として、完全にアーカイヴの内側に身を置き、その運営を自ら担うという経験を 7 年間にわたって続けてきた。

長々と書いて来たが、私自身は歴史を学ぶ者として、自分の研究活動のために、アーカイヴへの訪問者として外から資料群を利用するという立場を基本に据えながらも、ここ 20 年弱の期間は、同時に、アーカイヴを内側から見る位置に立つ経験も重ねてきたということである。そこからの多様な見えが、今度は自分自身のアーカイヴとその利用についての見方・考え方を押し広げ、かつ規定していったのではないかということである。

アーカイヴの内側から、資料の収集、選別から公開までの一連の作業に関わるようになり、アーカイヴをバックヤードから見つめ、時として、アーカイヴの資料だけでなく、物理的な設備・備品、作業に関わる人員、そして当然のことながら必要な予算等々、アーカイヴのマネージメントの部分にまで関わることになったことによって、アーカイヴはまた違った見えを私に示してくるようになった。その一つ一つについてここで言及してゆく余裕はないが、アーカイヴの内側から外に向けての資料の公開・展示に自らかかわった経験は、私自身のアーカイヴの見方、アーカイヴの見えかたを強く刺激したように思う。研究フォーラムのテーマにも繋がる、アーカイヴの創造性という点と重ねて、資料の公開、とりわけ不特定多数に向けての展示という経験に絞って、以下少しまとめてみたいと思う。

### Ⅲ　アーカイヴにおける創造的営為の多面性

研究フォーラムのタイトルは、「生成（ジェネティック）するアーカイヴ：創造の軌跡をもとめて」というものであったが、主催者の慶應義塾大学アート・センターは、周知のように、土方巽を主題とするものをはじめとする 10 を超えるアーカイヴ（資

料群）からなり、諸芸術領域を包括するアート・アーカイヴ（研究アーカイヴ）を自称する組織である。ここでのタイトルもまた、一義的には絵画や音楽や舞踏といった諸芸術創造の軌跡を求めて、と狭義に理解することも可能であろう。しかし、研究フォーラムのテーマは、私が関わっているような歴史研究をも創造的営為の一部と見做しているという風に身勝手に理解して以下、話を進めてゆこう。

これまでの一般的なイメージとしてのアーカイヴは、（公）文書（館）という言葉にも引きずられ、国家の記憶・記録を留める場として生まれ、それが歴史学などを主体とした学術研究に資料を提供する場ともなってゆくといったものであろうか。それが徐々に色々な意味でその範囲を広げ、さまざまな組織、個人の記録・記憶、多様な形態の記録にまで広げられてゆき、慶應義塾大学アート・センターのようなアート・アーカイヴでは、古典的なアーカイヴのありかたの他に、新たな芸術の生成に資料を提供する場ともなってゆくべき志向性をも持つに至っていると言うことができよう。地方自治体や企業のアーカイヴ、個人やさまざまな団体のアーカイヴもまた、地域の再構築や持続可能な形での産業の育成などなど、それぞれ固有の位置と役割とが期待されるようになっている。

先に述べたように、歴史学のような学術研究を研究者個々による新たなる解釈の生成過程としてみることが許されるのであれば、歴史研究も多様な芸術活動も、どちらも創造的な行為・営為であることに変わりはない。敢えて言えば、前者は学術としての「客観性」「継続性」「蓄積性」、後者は芸術としての「主観性」「独自性」「個性」などと言説の上では繋ぎとめられているのかもしれないが、いずれも、アーカイヴという場を通じて、人間の創造的な営為が生成するという点については選ぶところがない。

ここで少し唐突に感じられるかもしれないが、創造的営為の生成する場としてのアーカイヴにおける展示について考えてみたい。アーカイヴにおける所蔵資料の展示という行為は、それ以前のアーカイヴの内側における日常的な諸活動を前提にして措定されたテーマに基づき、丹念に時間をかけて準備されるが、会期が尽きれば展示空間は解体されてゆく。

曖昧な記憶しか残っていないので恐縮であるが、展示という言葉から、随分昔に見たNHKのドキュメンタリー番組のことを思い起こす。公文書の漏洩により、政府により長年にわたり秘匿されてきた事実が公になったことについての番組であったかと思うが、体育館のような広々とした空間一面に、びっしりと定規で測ったように美しく公文書のコピーが並べられている画像からその番組は始まった。奥行きのある空間は遠くに行くにつれて照明の光量が落とされ、一層その広がりとそこに並べられている文書が量的ならず質的にも無限であるかのような演出もなされていた。そして、その番組の要所要所で、その画像が何度か繰り返し挟み込まれていた。CGで作成されたものではなく、実際に番組のスタッフが数千枚のコピーを作成し、それを丹念に一枚一枚床に並べて撮影したものであった。もちろん、一面に並べられている個々の文書の内容が読み取れるはずもなく、その意味では番組が本来伝えようとしていた文書の

内容とは一義的には何の関係もない、作られた「絵」に過ぎない。しかし、番組の中で個別の文書を介して明らかにされていった事実の重大さは、その画像によって私の感性にしっかりと繋ぎとめられていったように感じられた。

テレビの娯楽番組によく見られるように、長大なドミノ倒しの準備過程を延々と放映してゆくものとは違い、慎重に時間をかけてひたすらコピーを並べていった作業そのものは全く映像化されているわけではなかったが、そうして準備された過程が想起される映像が私たちに訴えてくるものは、丁寧に分析され、理解されるべきものとして提示された情報内容の重大さに決して劣るものではなかったように私は思う。

また、江戸時代における商家の活動をテーマにしたある展示会では、商売の相手先毎にその取り引き状況を記録した大福帳と呼ばれる分厚い横長の帳簿が二十冊ほど綴じられたものがアーチ状に展示されているのを目にしたことがある。こちらもまた、具体的な大福帳の記載内容はほとんど見ることはできない一方で、時間の流れと商業活動の広がりとを、その古びた和紙の塊のボリュームで私たちの感性に訴えてくるところでは、先ほどのNHKのドキュメンタリー番組の一場面と通底するものがあるようである。歴史的文書に記載された内容よりはむしろ、その物理的な形状や、置かれ方、展示空間のありかた、照明のあて方などなどが重層的に私たちの感性に訴え、伝えるべき情報の量と質とを併せて私たちの脳裡に刻んでくるように感じられた。それぞれの資料に記録された情報を文字に起こし、数十冊の資料集として並べることに劣らず、おそらく多くの観覧者に対して、より直接的で体感的な刺激を与える結果となったのではないかと思う。

このような展示のありかたは何を示唆するのであろうか。展示者はそれなりの意図を展示品とその展示空間全体に込めるわけであるが、一度展示されると展示品そのものは展示者の意図を離れ、観覧者という別の視点からの見えとその感性とに委ねられてゆく。しかも、既に述べたように、期日が来れば展示会の空間は解体され、個々の資料はその展示会における相互の関連性を剥ぎ取られ、再び整理番号に従ってそれぞれアーカイヴの内側へと姿を消してゆく。

一方、展示会の場で観覧者がその内側に生成したものは、アーカイヴにおける研究や芸術活動のように論文や作品という形で客体化されることはなく、当然、継承も蓄積もされ得ない。観覧者と、一義的にはその展示空間を観覧者と共有すらしない展示者との間に置かれた展示品（それが静的なものであれ動的なものであれ、映像のように不断に過ぎ去るものであれ）とその展示のありかたを通して、直接的に観覧者が受けとめる刺激と、観覧者の理性と感性とに委ねられたさまざまな解釈の生成は、アーカイヴという場での創造的な営為の可能性の表出であろう。

ジェネティック・エンジンという造語は、非常に言い得て妙である。もっとも、アーカイヴを介して創造されるものは、研究アーカイヴという言葉が暗示しているような狭義の芸術活動や研究活動に限定されるものだけではないのだろう。展示会は、場合に依っては研究活動や芸術活動の持つ特権性の剥奪をも含意しつつ、新たな不特定多数による創造の可能性に道を拓くものなのかもし

れない。

おそらく、アート・センターで試みられている、展示会の再現プロジェクトの持つ意味もこの周辺に繋がり得るものではないか。そして、展示会の再現プロジェクトは、展示会の持つ創造性をトータルに再現し、その営為を更に記録する（アーカイヴする）ことを通じて、それ自体がアーカイヴの物理的な豊かさを拡張してゆくのみならず、更なる創造へのエンジンの出力を高める可能性を秘めているものではないのだろうか。それは展示のトータルなありかたが、創造的な営為であるという了解が伏在しているからのことではないか。

少し後戻りして、繰り返そう。展示会はアーカイヴの内側からの創造的なパフォーマンスであり、それはまた内側から外側に向かって見せる・外側から見るという古典的な関係性を越えて、アーカイヴを介在しつつ両者の間に繰り広げられる創造的な場となるのではないかということである。

ここまで考えてくると、そもそも私たちが一般的にアーカイヴ（文書館、研究資料館 etc.）と呼ぶ場での内側と外側の人々の関わりがそのまま、アーカイヴを場とする創造的なパフォーマンスであるようにすら見えてこないだろうか。おそらく、ジェネティック・エンジンという言葉の含意の一片もそのあたりで柔らかくそっと交差しているように感じられる。

アーカイヴの内側のアーキヴィストやキュレーターが措定する資料の文脈化や展示会の趣旨や意図そのものが意味をなさない、といったことを主張しているわけでは毛頭ない。展示は広義の教育として、蓄積された知の体系の一部を構造的に多数の人々に伝えてゆこうという意図と、そのための努力として高く評価されるものであり、極めて重要なことであることは言を俟たない。その一方で、展示が持つ権力性を和らげ、受けとめる側がそれをどのように内面化するかについては開かれているような展示の工夫もまた必要だろう。更には、展示が外側からのさまざまな視線に晒されることによって生成し得るものにも、内側から少し目を向けてゆくことも大切ではないだろうかということである。そこにうっすらと、公共性というものが浮かび上がっては来ないだろうかということも、ここで少々躊躇いがちではあるが、付け加えておきたい。それぞれのアーカイヴがその置かれた独自性を基礎に多様な展示を行うことを通じて、地域や社会一般にアーカイヴが開かれることでアーカイヴが公共性を得てゆく手がかりを探ってみるのも、あながち無駄なことではないだろう。

芸術家や研究者の種々の創造が、何らかの意味で繋がり、蓄積される可能性に対し開かれているのに反し、一般の人々の創造（反応と言ってしまってもあながち間違ってはいない）は、ほとんどその身体限りの、しかもその日、その瞬間限りの刹那的なものであるかもしれない。いや、おそらくそういうものであろう。しかし、人々の心に何かを創り出したことはだけは認めても良いだろう。そこにどれだけの意味を見出すことができるか、あるいは、見出そうとするかは、より長い時間幅で問われることであろう。

いささか議論を矮小化してしまうことになるが、ここで古文書室展示会での経験について少しだけ付け加えておきたいと思う。文学部古文書室は経済学部の野村兼太郎が公私にわたり収集した近世農村文書を中心に構成されている

アーカイヴであるが、公家である二条家の文書も 2,300 点ほど架蔵している。古文書室では、所蔵する二条家文書のメタデータを検索システムに投入すると共に、文書全体のデジタル化とその画像のホームページ上での公開を進め、検索と閲覧をウェブサイト上で完結できる体制の構築を、二条家文書を中心に進めて来ているが、2015 年 10 月に、その二条家文書を紹介する展示会をアート・センターの協力を仰いで行ったことがある[★8]。その際に、二条家文書の概要の紹介と共に、大量の文書の中から主に幕末期の著名な事件に関わる記述を中心にその内容を紹介するコーナーを設けた。また、展示空間の中央に、ほぼ一日も欠けることなく 15 年以上にわたって毎日書き継がれてきた日記をアクリル板の助けを借りて時代順に柱状に積み重ねて配置し、中央奥の床面には縦横 3 メートル 2 メートルの比較的大判の元禄期京都絵図を広げて展示した。

展示場での観覧者の反応を、アンケートや私自身の「参与観察」の経験から振り返れば、多くの観覧者は、この種の展示会においてよく見られるように、各々の知識や関心を手がかりに、個々の文書の展示・解説に相応の関心と興味を示していたが、山積みされた日記と床面に展開している絵図とにとりわけ興味と関心を抱いたようであった。京都の絵図を前にして、文書の展示と同じようにそれぞれの経験や知識を手がかりに、寺や通りを探すことで絵図を理解しようとしているようでもあったが、同時に、足許に広がった実際の京都の広さには及びもつかない「小さな絵図」の縦 2 メートル横 3 メートルの「大きな」画面に広がった世界全体に対面して、びっしりと書き込まれた情報とは違う何か別のものを感じていたようでもあった。また、山積みの日記にはそういった解釈を助けるきっかけとなるものはほとんどなく、ただ古びた和紙の積み重なりの厚みに、公家社会における記録の持続性やそのために費やされた時間を体感してもらおうという月並みな仕掛けであったが、少なからざる人々が、その物理的なボリュームに時間を感じてゆくだけにとどまらず、反射的に、その塊の中に一体何が書かれているかを知りたいという欲求を呼び覚まされたようであった。文書や絵図のモノとしての厚み、長さ、広がりなどを通じて、時間や空間を感じとると同時に、そこにとどまらず、量的な大きさ重さから、その質についての好奇心を呼び覚ますという人々のナイーヴで健康的な想像力と創造力とを垣間見たように感じられたのである。アーカイヴがその所蔵資料を展示するという意味で、展示を仕組んだつもりになっていた内側に立つ自分が、観覧者である外側から刺激されるという経験もまた、大変に貴重なものであった。

資料に刻まれた文字や言葉を丹念に吟味し、それを解きほぐし、知識の体系を授けてゆくといった展示がこれからも当面展示というパフォーマンスの主要な部分を占め続けてゆくだろう。それで良いのだとも思うし、アーカイヴの内側に立つ人間はそうすべきだと思う。しかし同時

二条家文書の展示（文学部古文書室展Ⅲ）

に、それはアーカイヴの持っている可能性の一部しか拓いてこなかったのではないかという省察と共に、感性に訴え、想像力に訴え、ひいては創造力に訴え得る展示というものが、更に次の関心を生み出すといった、より多様な人々にアーカイヴを開くことになり、かつ内側と外側とが相互に影響しあう創造的な展示というパフォーマンスの可能性を摸索してゆくこともまた大切なのではないだろうか。繰り返しになって恐縮であるが、展示はアーカイヴの内側から外に向かって資料を「展げ示す」パフォーマンスであり、外に対する仕掛けであるが、それは結果的にアーカイヴを介しての内と外との相互的で創造的な営為へとつながり得るものであろうし、そうあって欲しいと思う。

## Ⅳ　アーカイヴはだれのものか

最後に、アーカイヴとプライベートな個々人の生活との接点として、先ほど少しだけ言及した、JICA 横浜海外移住資料館で、私たちが実施した、先祖捜しセミナーの例を挙げ結びとしたい。1990 年の入管法の改正により、海外在住の三世までの日系人に日本国内において就労制限のない定住者ビザ取得が可能になったことにより、長期の政治経済社会全般にわたる不安に悩んでいた主にラテンアメリカ諸国に在住していた日系人たちが日本での就労を目的に来日したことは周知のところである。さまざまな混乱と軋轢の 30 年近い時間の経過の後、2019 年 4 月から日本は新たな外国人労働者の導入を開始するが、日系人の日本出稼ぎは、これからこの国で生起するであろう近未来の導入部として日本近現代史の中に位置づけられることになるのだろう。このような情況を背景に、日本にやって来た移住者（第一世代）の子供たち（その多くは日本で生まれ育ちながら、ペルー国籍を持つ外国人移民二世である）を対象に、「先祖捜しセミナー」を企画し、JICA 横浜海外移住資料館の所蔵資料を利用して、日本人の海外移住の歴史を学びながら、彼らがなぜ日本で生活をしているのかを理解してもらうセミナーと、そこでの参加者一人一人のルーツを自分で調べる経験をしてもらうワークショップとを 2015 年以降何度か開催してきた。日本人ペルー移住史のレクチャーや、同資料館の見学についてはここで改めて述べるまでもないが、アーカイヴの資料をそれぞれ個々の家の系譜を確認するための素材として利用し、自分自身の歴史的な位置を確認するという作業が、このセミナーの最大の目的であった。近代における国民国家日本の形成とその国民としての日本人の海外移住といういわば大文字の歴史と、何年何月何日生まれの何県何郡何村何番地の誰それが、何年何月何日に横浜を出てペルーに到着し、その後どのような生活遍歴を重ねていったのか、そしてその結果としてその孫やひ孫である自分が今ここにいるというリアリティについて、アーカイヴの所蔵資料を中心に再構成してもらうという極めて個別具体的な小文字の歴史とが交錯す

先祖捜しセミナー参加者の資料館見学

る場を、アーカイヴで提供しようと試みたものであった。

先祖捜しセミナーにおける個々の事例や分析については本稿の趣旨から離れることになるので、ここでは簡単にひとつのエピソードを紹介しておくことにしよう。2016年7月に行った2回目の先祖捜しセミナーで、日系ペルー人四世（在日日系ペルー人第二世代）の若者を担当した時のことである。事前にアーカイヴの資料等を利用してワークショップ参加者の先祖に関わる資料を収集しておき、当日は、できるだけ参加者自身に、こちらが予め準備した資料の中から、彼らの先祖についての記録を探してもらうようにした。曽祖父のペルー渡航についての記録が含まれている資料（「（契約）移民渡航者名簿」）のコピーを彼女に渡しそれを繰ってもらっていると、彼女は突然押し黙ったままこちらを凝視して、ようやく見つけ出した曽祖父の記録の記載されている頁をこちらに向け、そこにある横浜港出港の日付を指差しながら絞り出すような小さな声で「100年前」とだけ呟いた。その日付は、1916年4月1日とあった。ワークショップを行っている部屋の窓からは、日本人移民たちがペルーへと旅立っていった大桟橋が形こそ変えたものの、100年前と同じ場所に横たわっている。二人で桟橋の方をしばらく見入りながら、ちょうど100年前に、あと一月足らずで25歳になるという福島の若者がそこからペルーへと旅立っていったという事実に思いを馳せた。下調べの時には、私はその日付を目にしながらも、さして気にすることもなかった。しかし彼女は、資料の中に見つけ出した曽祖父の記録の中に、その横浜出発がちょうど100年前であったことに大きな衝撃を受け、100年後に自分が横浜にいるということで、自分の祖先とのつながりをより強く実感することができたのではなかったのか。アーカイヴの半ば内側に立つ私が、日常的に目にする多くの情報の一つとして見過ごしてしまったところに、外側の彼女は自分自身の存在の歴史性をリアリティを持って体感した、ということになるのだろう。JICA横浜海外移住資料館は、制度的には独立行政法人国際協力機構のJICA横浜センターという組織に所属するアーカイヴであるが、少なくともその瞬間には、彼女の生に直接関わるアーカイヴになっていたように思う[★9]。

先祖捜しワークショップ

2018年11月17日に開催されたアート・センターのシンポジウム「ジェネティック・エンジン」のトークの中で本間友は、アーカイヴの持続可能性に絡めて、公共性をパーソナルな領域に持ち込むことでよりリアリティを持って提示してゆくことから、更に公共性の次元に立ち戻るような発想について、さりげなくではあるが非常に穿った発言をしている。その発言と、私たちの先祖捜しセミナーの試みがどこかで重なり合うものであるのかどうか、俄に判断することはできないが、本間友の発言を耳にした時、先祖捜しセミナーのことを私は思い起こしていた。

アーカイヴが、制度的な所属関係を越え、生というリアリティを抱えた個々人と交錯する場となり得れば、アーカイヴの持つ意味もまた自ずと制度的な所属関係を越えた地平に立ち上がってくることになるだろう。そのためには、研究者、アーティスト、アーキヴィストなどなどといった限定形容詞を頭につけないフラットな「個」というものにアーカイヴを開き、繋ぎ、そこから公共性が立ち上がってくることを俟つことになるのだろうか。そしてまた、アーカイヴの創造性は、アーカイヴを「どこから見ているか」の多様性にこそ担保されていると言ってもあながち的外れではないようにも思う。

**註**

☆1――脚気病調査委員会編『龍驤艦脚気病調査書』、東京：海軍省、1885。

☆2――柳田利夫「日本人移民のナショナリズム形成　――二等水兵小島吉次郎墓標再建をめぐって――」柳田利夫編著『ラテンアメリカの日系人』東京：慶應義塾大学出版会、2002、41–85 頁。

☆3――国立公文書館アジア歴史資料センター Japan Center for Asian Historical Records, National Archives of Japan. https://www.jacar.go.jp/（参照 2019–3–31）

☆4――枚挙に暇無いが、最近では 2018 年 12 月に移転改築された沖縄県立図書館 Okinawa Prefectural Library の事例等を参照。https://www.library.pref.okinawa.jp/（参照 2019–3–31）

☆5――宮崎清孝・上野直樹著『視点』認知科学選書、東京：東京大学出版会、1985。

☆6――JICA 横浜 海外移住資料館　Japanese Overseas Migration Museum, https://www.jica.go.jp/jomm/（参照 2019–3–31）

☆7――慶應義塾大学文学部古文書室　https://kmj.flet.keio.ac.jp/

☆8――文学部古文書室展示会 2015「二条家文書の世界　幕末を記録する」https://kmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2015/（参照 2019–3–31）

☆9――JICA 横浜海外移住資料館・移住資料デジタルネットワーク化プロジェクト・Pioneros 参照。http://dji.jomm.jp/jp/（参照 2019–3–31）
また、沖縄県立図書館における「沖縄県系移民一世ルーツ調査・相談サービス」も参照のこと。https://www.library.pref.okinawa.jp/about-okinawa/cat1/post-13.html（参照 2019–3–31）

（やなぎだ　としお・慶應義塾大学名誉教授／史学）